
夏のホラーギャグ祭り2010～秋～

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏のホラーギャグ祭り2010（秋）

【Nコード】

N0764N

【作者名】

ごほんライズ

【あらすじ】

去年の夏に書いてうまくいかなかったのをリメイクしました。これもうまくいってるのかどうかわかんねえ！！

相当怖いです。ちびっこはママといっしょに読もう。もらしちゃうから(しっこ)。

おっさんは妻といっしょに読もう。もらしちゃうから(うんこ)。
ひとり暮らしの女性はわたしを呼んでください。いっしょに読んであげます。そして、読んだあとはベッドの上でむっふっふふふふふふ。

「いやああああああ」

さあすでに怖くなってきましたね。では、はじめはじまり。はあはあはあはあ。

「部屋から出てけええええええええええ」

深夜の教室。恐ろしい恐ろしい怪談話の時間だ。

中央に口ウソクが何本か。一人しゃべり終えることに一本ずつ火を消していくのだ。

「まず誰から行く?」

「そりやまあ大人の珍先生からでしょう」

珍先生はメタボリックな巨体をぶるぶる震わせている。

「怖いよう。怖いよう」

そう。珍先生は自分の怖い話を思い出し震えていたのだ。

「怖い怖い怖い話したくない。ぶるぶる」 「珍先生、落ち着けよ」

「これが落ち着いてられるか!口裂け女が出たんだよ!」

しーーーーーん。

珍先生のやつ、いきなり落ちをゆつてしもつた。

「もうやだ。怖いから消すよ。ふっ」

口ウソクが一本消えた。

「あのその。次は」

「じゃあ、あたし行くわ」

「おっロリ華」

「これは最近の話よ」

みんなごくりとつばを飲む。

「うーうーうんこもれそう」

「珍先生。静かに！」

ロリ華が静かにしゃべり始めた。

これは、最近のことなの。あたしの住んでるアパートで隣の部屋から毎晩うめき声が聞こえるのよ。本当よ。何だか切ないうめき声が。助けて助けてという風に聴こえたわ。泣いてるようにも感じたわね。

「うわあ。怖いなあ。幽霊かなあ」

お隣さんはね。若い夫婦と幼稚園に通ってる子どもが住んでるの。この若い二人がひどいやつでねえ。両方金髪でピアスしてて、たまに会って挨拶しても無視。にらんでくるわ。感じ悪い二人。

まあ、それはともかく、夕方になると、「うぎゃああああああ」とか「わぎゃああああああ」とか聴こえるの。

「うわあ。何それ」

「うんこもれちゃう」

「珍先生！しっ！」

それでまた夜にうめき声よ。んで、この前、町内のそうじ会でね。若い夫婦の子ども、幼稚園児のよしあきくんは、理由を聞いたの。でも、よしあきくんはぶるぶる震えて何も答えないの。よく見たらよしあきくんの腕や足にアザがあったわ。鼻も何だか殴られたみたいになっちゃって変形してたし。

「それってまさか」

ちよつと黙ってちようだい。そこであたしは思ったの。

「何て」

隣の部屋には恐ろしい幽霊が出るのねえ、て。

「違うよ！話の流れからして完全に児童虐待だろ！」

その数日後、若い二人は警察に連れていかれたわ。。。

「!!!!!!!!!!!!!!」

みんな、恐怖感というより、不愉快な気分になってる。

ロリ華がふうと口ウソクを消した。

その後も変な話ばかりだった。

よしおがいじめがいやになって飛び降り自殺したとき、ちょうど走っていたトラックの荷台に着地してそのまま新潟に行ってしまった話（助かったらええやん!）や、まさえが、風呂に入っていたとき、窓から視線を感じるので窓をぱつと開けたら、そこに、興奮したぬらりひよんとか妖怪がいたという話（ベタベタやん!）や、とにかくひどかった。

「まったく、ろくでもない話ばつかじゃないか」

最後の一本となった。たけしの番だ。

「じゃあ、たけしはいいホラー話があるっていうの?」

「当たり前だよ」

「オレ、もうトイレ行くよう。もれちゃう」

「勝手に行ってきなさい」

珍先生が席を立って、廊下に出た。

「じゃあ話してよ」

「任せておけ」

たけしはしゃべり始めた。

これは恐ろしい話だよ。恐ろしすぎるよ。みんなは三角貿易で知ってるかい。江戸時代の話さ。イギリスとインドと中国が貿易するの。ただの貿易じゃないんだ。イギリスが工場でたくさん綿製品を作るだろ。イギリスでは売り切れないから、植民地であるインドに無理矢理売りつけるわけ。インドの綿業界は大打撃さ。それだけでなく、インドで栽培していたアヘンという麻薬をイギリスは中国に売りつけるわけ。中国はめちゃうかさ。アヘンを吸うとやる気がなくなっちゃうんだ。みんなだめ人間になっていき中国は弱くなっていっただんだ。そして、アヘン代としてイギリスは中国から茶をも

らう。

「うわあ。イギリス頭いい」

「てか、極悪」

「ある種、怖いね」

まあまあ。話を聞け。そんなのはそんなに怖くない。もっと怖いのは太平洋戦争だ。日本では大東亜戦争と呼ばれていたが。いわゆる第二次世界大戦。そのとき、大日本帝国はドイツと軍事同盟を組んでいた。ドイツは当時、国内のユダヤ人を大虐殺していた。しかし、大日本帝国は大量のユダヤ人を日本に呼んで救出したんだ。同盟してたのになぜかって。そりゃ、当時、大日本帝国には人種差別撤廃という国是があったからね。ユダヤ人虐殺だけは許せんてことさ。今の日本と全然違うねえ。今の日本はアメリカと同盟組んでるからってアメリカのイラク侵略を大賛成した。同盟組んでるけど侵略はだめですの一言が言えないへなちよこさ。当時の大日本帝国はすごいねえ。でも怖いのはこっからなんだ。アメリカに亡命したユダヤ人科学者チームが原爆を開発したわけ。普通ならドイツに落とすと思うでしょ。ところがどっこいユダヤ人の恩人である大日本帝国の広島と長崎に落とすやがった。なぜ。要するに同じ白人国のドイツには投下できぬと。イエローモンキーの上になら心が痛まない人種差別さ。あとソ連に対する威嚇もあったかもね。しかも、二種類の爆弾を落としたんだ。完全に実験さ。両方試したかった。そもそも、広島長崎以前に大日本帝国は有条件降伏は打診してたんだ。なのに絶対不可能な無条件降伏をアメリカは叩きつけた。原爆を落として実験結果を知りたい。ただそれだけのためにね。

どうだ。怖いだろ。

「はあ」

「なるほど。ぱちぱち」

「たけちゃん、もの知りだねえ」

みんなあくびしてる。

「なんだよ。一生懸命話したのに！」

「怒るなよ、たけちゃん。早くロウソク消しな」
「う、うん」

たけしが最後の一本をふうと消した。

「ハッピーバースデーたけちゃん！」

急に電気がつき、ぱんぱああんとクラッカーが景気よく鳴る。

「え。え。え」

「おめでとー！」

「誕生日おめでとー、たけちゃん！」

いつの間にか、ケーキが用意されてる。

ぱちぱちぱちぱち。

「え。え。ええええええええええ」

「たけちゃん。ケーキ食べようぜ」

「おいしいよ」

「誕生日おめでとー」

たけしは何かようわからんが、感激した。「みんなありがとう。」

ありがとう」

その頃、珍先生は廊下で、長い髪の白装束の足がない幽霊に追いかけてられていた。

「うらめしや〜」

「きゃあああああ。もれるうつつうつつうつつ」

ぶりつぶりつ。

「来ないでええええええええええええええええ」

廊下の闇に消えていく珍先生と幽霊。

消灯。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0764n/>

夏のホラーギャグ祭り2010～秋～

2010年10月8日11時04分発行